

# 農業に新しい夢をかけて

文・木下正実

都市が農村から若者をひきはがしつづけて久しい。だが、生活に「農」を取り戻そうとする青年夫婦たちもまた力強く生まれ続けている。そこには、次代の後継者たる人の「生命と農」の意味を問っている。

## 農村は生き生きと暮らさねじやん

今井和夫・ひさ代さん 兵庫県千種町農協管内

揖保川と西播丘陵の峰を分かつて下ってくる千種川は、赤穂のところでたつぷりと播磨灘に注ぐ。その川が源流を発する中国山地のまっただなか、兵庫県宍粟郡千種町岩野辺に今井和夫さん(32)、ひさ代さん(33)夫妻が東大阪市から越えてきて二年めになる。

二人とも大阪では社会科や英語の教鞭をとる中学の教師だった。だが、いつしか自分のなかに、生徒を頭ごなしに管理するいやな人間を見るようになっていた、と和夫さんは言う。

「教育のあり方を含め、都市を中心とする社会、効率優先の考えに疑問をもちました」

たとえば町場ではごみひとつ燃やせない。糞尿も自分で処理することはないし、下水道のその先に想像をはせることもない。

教師を思いきろうと考えたときまず農業が頭に浮かんだ。

「数ある職業のなかで、いちばん罪のない仕事ではないだろうか」

食料を自分の手で確保する、絶えず自然と対話する……

「ほんとうの意味で自立した生活

をした」と思った

それが和夫さんの動機だった。

ひさ代さんも、都会暮らしに疑問を抱いていた。町場の生活では、

なにより物を得るために夫婦して勤めに出、時間に追われ、なんでも金で解決してしまう。

「教師として、多くの子どもたちの家庭がその機能を果たしていないのを見ってきました。でも、自分のところだつて大差ないんです」

だから、和夫さんが家族そろって従事できる農業を選んだのは、

ひさ代さんにとつても望むところ

だった。ひさ代さんは東大阪市の非農家生まれだが、母親の実家が牛飼にあり、小さいころから川でドジョウやヤゴを捕ったりして野原を駆けまわって育った。そんな体験をわが子にも味わわせたい。

和夫さんも明石市のサラリーマン家庭の出身だ。その明石市も子どものころは、家を一步出れば田んぼが広がっていた。とはいえ、土にさわったこともなかった。三年前の春、二人はそろって辞表を出したが、

「周囲に引き止められて、わたしだけ辞表を撤回したんですよ」

と、ひさ代さんは笑った。ひさ代さんが学校を辞めるのは翌春。その一年、和夫さんは藤井寺市の農家で農業を学んだ。朝は四時起き。畝をふるうと足ががくがくした。農業で食っていくことは決して甘くないことを噛みしめてから、この地に入ってきた。

指折り数えて両手で足りない作目を植えた。

「野菜の本に載っているものを片っぱしから作ったわけです」

てらもなく和夫さんは笑った。一気に四十本も栽培したナスは

余るほど収穫して腐らせ、百五十株植えたサトイモは湿りすぎの土

地条件で腐らせてしまった。これは率直にいつて失敗だった。ひさ代さんは天候日誌をつけている

が、平成元年は、一年の三分の一が雨だった。二人はこれから気象

とも闘わねばならない。

夫婦の夢は、自然養鶏を土台にした循環型農業を営むことだ。卵

で経営の安定をはかりつつ、鶏糞を肥料に無農薬・有機農法で米や

野菜を作りたい。鶏舎建設地も町



畑は家族のふれあいの場にもなっている

はトマト、キュウリ、シシトウ、オクラ、キャベツ、ジャガイモ……

## 夢は自然養鶏、循環型農業

千種町は、かつて「六粟三尺」の名を全国にはせたキュウリの産地だった。昭和三十年代には、毎日、大型トラックが十台近く京阪神へ往復したという。だが、今は老人が人口の二割を占め、放棄される耕地もふえている。

今井さん夫婦が「入植」したのも、そんな田畑だ。老人所帯三戸から無償で四十五アールの水田と十アールの畑を借り受けた。畑に

## ほんもの消費者とネットワーク

八木龍夫・幸子さん 和歌山県中辺路農協管内

八木龍夫さん(28)、幸子さん

移り住んだ。

(32)夫妻は、平成元年の十一月、和歌山県西牟婁郡中辺路町小皆に家屋・田畑・山林合わせて約一ヘクタールを購入して、奈良市から

それから一年余り。長く放棄されていたウメ・クリ園(三十五アール)とシキミ栽培(百五十本)を生き返らせた。ウメはさつそく

「過疎の町でも農業でやっていける」ということを身をもって示してもらえば、千種の若者の励みにもなるでしょう。わたしもともに消費者開拓に努めたい」と期待は大きい。

ジャムに加工して地元の土産店や自然食品店に出荷し、おいしいと評判をとった。

繁殖牛としてウシ一頭も飼いはじめた。たつぷりの堆肥を三十アール